

## 目次

### 論文

西アジア都市形成期の土器焼成技術

—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—

小泉 龍人 1

エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について

矢澤 健 23

### 研究ノート

骨角器インダストリーに見る新石器化の一側面

—技術選択と原材料からの検討—

新井 才二 47

### 資料紹介

初期イスラーム時代のファイユーム陶器

—ベナキ博物館所蔵資料から—

長谷川 奏 57

### 動向

アルメニアの文化遺産分野における日本の国際協力

有村 誠・藤井 純夫 61

紀元前5千年紀イランをテーマとした国際ワークショップ

三木 健裕 69

イラン、テヘラン大学で開催された「若手考古学者国際会議」に参加して

安倍 雅史・三木 健裕 75

米国オリエント学会 2013 年大会

近藤 康久 79

### 報告

日本西アジア考古学会 2012 年度ワークショップ A「西アジア青銅器時代の葬制」報告

久米 正吾 83

西アジア考古学関連学術論文・出版物

87

西アジア発掘調査報告会報告一覧・調査彙報

93

投稿規定・執筆要項

95

編集後記



## 初期イスラーム時代のファイユーム陶器

—ベナキ博物館所蔵資料から—

長谷川 奏

Fayyumi Bowls in Early Islamic Period:  
Observation on Pieces of Benaki Museum

So HASEGAWA

キーワード：初期イスラーム時代、ファイユーム陶器、ベナキ博物館、エジプト、施釉陶器の開発

Key-words: Early Islamic Period, Fayyumi bowls, Benaki Museum, Egypt, innovation of glazed wares

本稿は、アテネのベナキ博物館に所蔵されている初期イスラーム時代の多彩釉陶器の小鉢7点の観察報告である。これらは、かつて陶器研究者のフィロンによってベナキ博物館カタログで紹介されたものを含んでいるが(Phylon 1980: 42-43, 46, 49, 51)、本稿では、エジプトにおける施釉陶器の開発の観点から、同陶器の成形技法の特徴に焦点を当てて紹介する。初期イスラーム時代には、多彩釉陶器以外にも、白濁釉陶器やラスター彩陶器など、個性的な陶器が登場するが、その中でも本稿の対象とした小鉢は、緑釉、黄釉、紫釉の組み合わせによる独特の多彩釉陶器である。

本観察の対象とした7点は、いずれも完形の鉢型陶器である。対象のうち、inv.1197だけはカタログに登録されていないが、inv.1199の記述欄に、inv.1197が同様の装飾を持つ小鉢であることの注記がある。以下の1)~5)は、これらの観察報告である(表1)。

1) 器形：登録番号(inv.) 1344のみは器高7cm、口

径26.5cmを測る浅鉢であるが、他の6点はいずれも器高3.8~4.8cm、口径12.7~14.4cmほどのいわゆる小鉢の類である。

- 2) 胎土：フィロンはinv.1199, 1200, 1338, 1344, 19790の5点を赤(茶) (“red”)と表現しているが、筆者が観察したところによれば、ナイルシルト系の赤茶系胎土よりは、ビザンツ時代のエジプト赤色光沢土器(Egyptian Red Slip Ware)に特徴的なピンク系陶土に近い。また1点は、フィロンの観察でも、ピンク系となっている(inv.1305)。
- 3) スリップ：おそらく全点、クリーム色のスリップ(Cr.)が塗布され、その上から釉が掛けられている。
- 4) 成形：口縁はinv.19790の浅鉢のみがやや外側に開く口縁を持っており、この群の中では特殊であるが、他は緩やかに内湾して口縁は単純に引かれるか(inv.1197, 1200, 1305)、あるいは口縁外面に撫でが施されて、断面が三角形状を呈する(inv.1199,

表1 対象遺物の観察表

番号	部位	器形	胎土	スリップ	器高	口縁	底部	成形	装飾	分類	ベナキ博物館 カタログ
1197	完形	鉢形	赤茶 (ピンク系?)	Crスリップ	4.8	14.4	6	口縁単純、胴部外面・底部削り痕、高台	緑釉、紫釉(内面)	多彩釉陶器	図なし (1199と類似)
1199	完形	鉢形	赤茶 (ピンク系?)	Crスリップ	4.6	13.8	6.6	口縁撫で、胴部外面・底部削り痕、高台(図2-1)	黄釉、緑釉(内面) (図1-1)	多彩釉陶器	p.46, Fig.87
1200	完形	鉢形	赤茶 (ピンク系?)	Crスリップ	4.7	14.2	6	口縁単純、胴部外面・底部削り痕、高台(図2-2)	黄釉、緑釉、紫釉 (内面)(図1-2)	多彩釉陶器	p.42, Fig.76
1305	完形	鉢形	赤茶 (ピンク系?)	Crスリップ	3.8	12.7	5.2	口縁単純、外胴・底部に明瞭な削り、高台(平底に近い)	紫釉(内面)、白濁釉 (内外面)(図3)	多彩釉陶器	p.51, Fig.101
1338	完形	鉢形	赤茶 (ピンク系?)	Crスリップ	4.4	12.2	4.5	口縁撫で、胴部外面・底部削り痕、高台(図2-3)	黄釉、緑釉、紫釉 (内面)	多彩釉陶器	p.43, Fig.78
1344	完形	鉢形	赤茶 (ピンク系?)	Crスリップ	7	26.5	11.5	口縁外反、胴部外面・底部削り痕、高台(図2-4)	黄釉、緑釉、紫釉 (内面)	多彩釉陶器	p.49, Fig.97
19790	完形	鉢形	赤茶 (ピンク系?)	Crスリップ	4.6	12	5.1	口縁撫で、胴部外面・底部削り痕、高台	黄釉、緑釉(内面)	多彩釉陶器	p.44, Fig.81

1338, 19790)。対象の7点は、いずれも丸みを帯びた胴部を持ちながらも、胴部の外面一帯に削り痕が残る。1点は平底に近い浅いものであるが(inv.1305)、他はいずれもはっきりとした畳付を持つ高台が作られている。

- 5) 装飾：対象のうちの5点に胴部内面の見込みを中心にして発する放射状の文様が描かれており(inv.1197, 1199, 1200, 1305, 1344)、他の2点も放射状文に近い刷毛塗状文様である(inv.1338, 19790)。これらの放射状文や刷毛塗状文様は、緑釉、黄釉、紫釉などが用いられており、見込みの文様面を、紫釉(inv.1200)や黄釉(inv.1344)の区分帯ラインで明確に描いているものもある。

さて、対象とした緑釉、黄釉、紫釉の組み合わせを持つ多彩釉陶器は、一般的には、ファイユーム陶器のうちの早期の群として位置づけられている。ファイユーム陶器とは、ファイユームで窯址が確認されているわけではなく、ファイユーム近郊で生産されたであろうという推論からの名称であり、窯址は確定していない。多彩釉陶器の中で、一般的にファイユーム陶器と言えば、白濁釉が全面を覆い、その下にトルコブルー、緑、紫(マンガン)、茶等の多彩な色合いを持つことで知られており、胎土はナイルシルトとマールの混合と推測され(砂質分が多く含む陶土と表現されることもある)、黄色味を帯びる。ファイユーム陶器の中のひとつで、錫ベースの白濁釉の上にコバルト釉をかけた技法は、エジプトにはもともとなかった技法であり、また中国陶磁器に特徴的な器形も多いことから、唐からの影響を受けた一群として位置づけられている<sup>1)</sup>。こうしたいわば「弱い」多色の色あいが特徴となる群に対して、より「強い」彩りを持つ一群(図1)が、早期のファイユームと考えられているグループである<sup>2)</sup>(本稿では、

便宜的に、前者を〈後期ファイユーム陶器〉、後者を〈初期ファイユーム陶器〉と呼ぶこととする)。〈初期ファイユーム陶器〉の存在は1980年代から1990年代の初めにかけて、出土事例の増加を背景にして、欧米諸国の研究者によって喚起されたものの、筆者の管見によれば、それから20~30年近くを経た今も決して報告例は多いとは言えないようである。博物館に収蔵されている美術品からは多くが期待できず、また中国からの影響を受ける以前の多彩釉陶器の発展は地域的な前身伝統に根ざしている可能性があることから、必然的に発掘調査による出土品に期待がかけられるが、古代末期から初期イスラーム時代にかけての遺跡からの報告事例は、中部エジプトのアシムネイン(Bailey 1993: 205-206, 207-1~4)や東方デルタのティンニース(Anne Schmitt 2011: 104-105, pls. 11-12)などが、ファイユーム陶器の出土などを伝えているが<sup>3)</sup>、年代上の位置づけの細部を論じる議論には及んでいない。

さらに〈初期ファイユーム陶器〉に関しては、これより早い施釉陶器の一群となる可能性がある「コプト陶器(Coptic Glazed Ware)」と〈初期ファイユーム陶器〉の関係が、いまひとつ明らかでない点是指摘しておかなければならない。「コプト陶器(Coptic Glazed Ware)」とは、素焼きのコプト彩文土器の上に釉がかけられたものが多くみられることからその名がついた一群である。その代表的な出土事例の一つが、ヘレニズムから中世までの層堆積を誇るアレクサンドリアのコム・アル=ディッカであるように(Rodziewicz 1978: figs. I~III)、これらのうちの「コプト陶器」は帝政ローマ時代~ビザンツ帝国時代を通して、環地中海圏の技法伝統を踏襲した赤色光沢土器の系譜(Terra Sigillata Ware~African Red Slip Ware~Egyptian Red Slip Ware)と、初期イスラーム時代の「コプト陶器」との関連が捉え易くなっている群である<sup>4)</sup>。またアカバでの出土例から、「コプト陶器」は、パレスティナ~サウジアラビア沿岸の在地の食卓器とも深い影響関連があり(Whitcomb 1989: 173-175)、「おそらく8世紀頃に無釉のコプト彩文土器から発展した初期の施釉陶器の生産センターがアレクサンドリアにあったであろう」というワトソンの示唆<sup>5)</sup>(Watson 2004: 36)にも、状況証拠から総合して頷けるものがある。ただ「コプト陶器」に一般的な鉢類は、胴部下方には強い篋削りが施され、胴部下方から口縁部まで比較的真っ直ぐに立ち上がることを特色にしており、底部も削りを受けた平底に作られる場合が多い。それに比較すると、〈初期ファイユーム陶器〉は、「コプト陶器」に特徴的なピンク系陶土(あるいはシルト系陶土が混合している可能性もある)の利用や胴部下面に浅い篋削りの痕跡は残るものの、小鉢類の胴部は全体的に丸みを帯び(図2-1~4)、浅鉢の口縁は赤色光沢土器の伝統を離れて

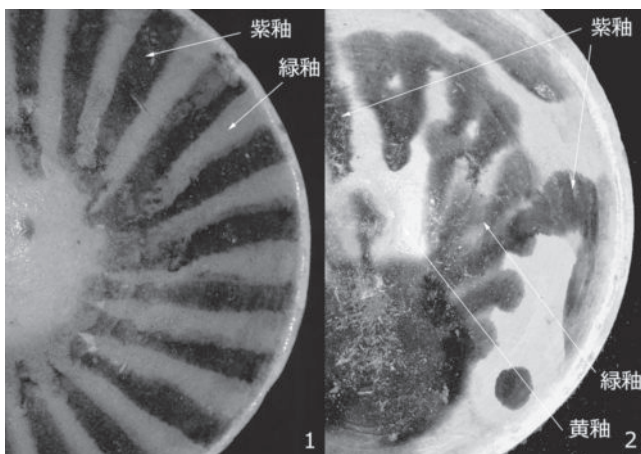


図1 代表的な釉の装飾例  
1: inv.1199/2: inv.1200

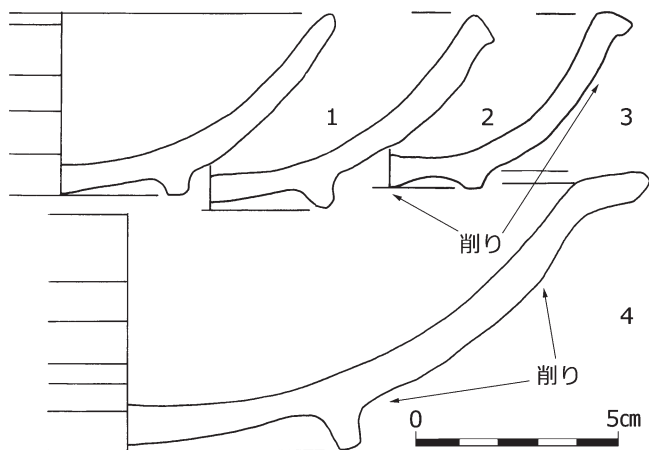


図2 器形のバリエーション

1 : inv.1199/2 : onv.1200/3 : inv.1338/4 : inv.1344

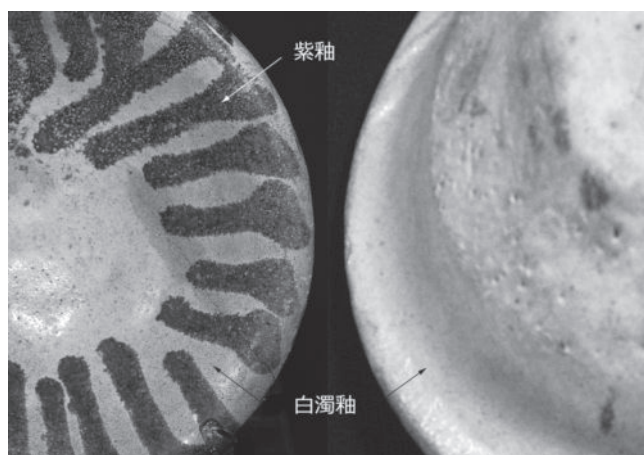


図3 白濁釉を有する事例  
inv.1305

外側に水平に引かれ、ファーティマ朝期のラスター彩陶器 (Pylon 1980: Figs. 151, 154, 174, 179 etc.) 等と類似した形態を示し (図2-4)、両者の間の繋がり、はまだ自然な形で説明されていないと思われる。また〈初期ファイユーム陶器〉の小鉢の中には、内面には紫釉で放射状文様が描かれるものの、内外面全体が厚い白濁釉に覆われている事例もあり (図3)、〈後期ファイユーム陶器〉への移行期に位置づけられることを想定させるものもみられる。フスタート遺跡からは、これらベナキ博物館所蔵のファイユーム陶器と類似する小鉢 (図4-1~3, 5) および浅鉢 (図4-5) も出土しているが、胎土は〈後期ファイユーム陶器〉に特徴的な複合胎土が多く、施釉陶器の登場時期に関わる最初期の一群 (桜井・川床 1992 : 251-256、図版IV-3-1 : 1-6)<sup>6)</sup> とはいくぶん隔たった印象がある。その間の空隙を埋める作業は、今後のフィールド調査の成果に期待が寄せられているという状況と言えようか。

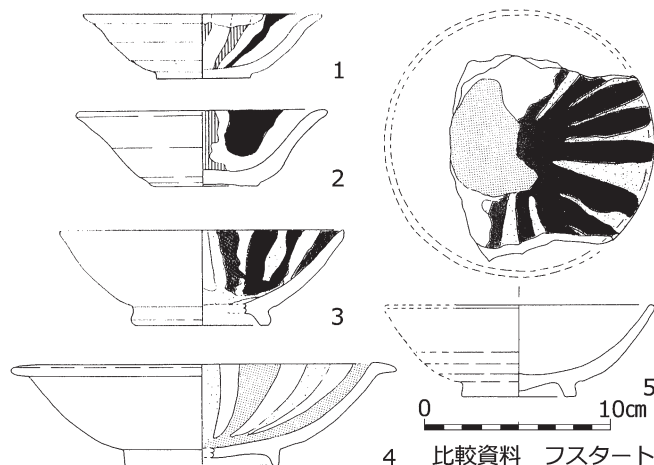


図4 比較出土事例

1, 2 : 桜井・川床 1992 図版IV-3-2 : 6, 7/3 : 図版IV-3-3 : 7/4 : 図版IV-3-3 : 8/5 : 図版IV-3-3 : 5

註

- 1) スカンロン (Scanlon) はこれを、「Fayyumi I」と呼び、年代は、おおよそ10世紀頃が想定されている (Scanlon 1993: 295-296, Colour Plate 1, 2)。
- 2) スカンロンの「Fayyumi II」がこれにあたると思われるが、年代的には9~10世紀頃か、という示唆のみを与えて、詳細な理解は省いている (Scanlon, *ibid.*, Colour Plate 1)。スカンロンのこの論考は、同氏が1960年代から80年代まで進めてきたフスタートの発掘資料から得られた層位的な観察がベースになっている。
- 3) このうち、アシュムネイン出土の4点は、報告者はスカンロンによる分類との関わりを論じていないが、装飾のあり方から、〈後期ファイユーム〉の可能性もある。一方、ティニス出土のIT05-221-1は本稿 (ベナキ博物館所蔵) の〈初期ファイユーム陶器〉T05-216-2は小鉢の単純口縁のタイプ (inv.1197, 1200, 1305) に類似しているようにも思われる。
- 4) コーム・アル=ディッカの出土資料内では、「コプト陶器」と Egyptian Red Slip Ware 中の「Groupe O」との強い関連が指摘されている (Rodziewiczs 1978)。
- 5) これらが中国からの強い影響下に生産された白濁釉陶器 (Opaque White Glaze Ware) を生み出したサーマッター期時代に前に位置づけられることから、地域的な前身伝統との関わりが着目される。
- 6) 本報告書内では、最初期の一群を「ファイユーム1」とし、他の群を「ファイユーム2~4」として位置づけて、その発展過程を推測している。これらの事例は胎土がピンクで、その殆どが緑釉の単彩である。なおフスタート遺跡では、1960年代以降、アメリカンリサーチセンターやフランス考古学研究所が調査を行っており、年次概報も多いが、本稿ではそれらのうちの全体報告のみを対象とした。

参考文献

- Anne Schmitt, J. B. 2011 La Céramique de la période fatimide à Tinnis: premier état de la question, *Cahier de la Céramique Égyptienne* 9: 95-139.
- Bailey, D. M. 1993 Islamic Glazed Pottery from Ashmunein: A Preliminary Report, *Cahier de la Céramique Égyptienne* 2: 205-219.
- Phylon, H. 1980 Chapter 2: Wares Decorated With Different Coloured Glazes, In H. Phylon et al. *Early Islamic Ceramics: Ninth to Late Twelfth*



- Centuries*, 35-62. London, Sotheby Parke Bernet Pubns.
- Rodziewicz, M. 1978 La céramique émailée copte de Kom el Dikka, *Étude et Travaux* 10: 337-345.
- Scanlon, G. T. 1993 Fayyumi Pottery: A long-Lived Misnomer in Egyptian Islamic Ceramics. Type I, *Bulletin de la Société Archéologique d'Alexandrie* 45, 295-330.
- Watson, O. 2004 *Ceramics from Islamic Lands*, London, Thames and Hudson.
- Whitcomb, J. 1989 Coptic Glazed Ceramics from the Excavations at Aqaba, *Journal of American Research Center in Egypt* 26: 167-182.
- 桜井清彦・川床陸夫編 1992『エジプト・イスラーム都市 アル＝フスタート遺跡：発掘調査1978～1985年』早稲田大学出版部。

長谷川 奏  
早稲田大学総合研究機構  
So HASEGAWA  
Comprehensive Research Organization,  
Waseda University